

# 中世曹洞宗における偈頌運用

——逆翁宗順を中心として——

大橋 崇 弘

## はじめに

曹洞宗における詩作については道元の頌より、出家者には修行の障害となるため厳しく戒められたと考えられる。これは『正法眼蔵随聞記』に、「今代の禅僧、頌を作り法語を書かん料に文書等を好む。是即非也。頌不作と心に思はん事を書きたらん、文書不調とも法門を可書也。」<sup>①</sup>とある事からも推察できる。一方、『永平広録』には約四三〇首もの偈頌が含まれ、何故このような膨大な詩作が残されたかは、先学により諸説が提示されている。<sup>②</sup>本論では特に、中世洞門社会の中で如何にして詩作用の辞典が成立・受容されたかに焦点を当てる。

中世曹洞宗における偈頌運用（大橋）

本論では、愛知学院大学禅研究所蔵の『点鉄集』<sup>③</sup>を一次史料とし、考察の対象とする。その構成内容を紐解きつつ、現在までに発見されている数点の写本との比較を通して成立時期の特定を試みる。その上で中世叢林において偈頌の作成法がどのような位置付けであったかを考察する。

## 一 『点鉄集』の著者と構成

『点鉄集』は、洞門僧侶によって著された本であるが、いかなる内容の書であるか、また誰の著したものであるかについては、一般にはもちろん宗門僧団内においてさえも正確なことはほとんど知られていない。従ってまずはその著者の伝承を精査すると共に本集の内容・書名・成立など

の諸問題について究明したい。

『点鉄集』の著者は、曹洞宗の僧、逆翁宗順（尾張乾坤院二世、川僧慧済の法嗣、一四三三〜一四八八）とされ、『七十五卷完本正法眼蔵』、『伝光録』の現存最古写本となる乾坤院本を書写した芝岡宗田（同院三世、？〜一五〇〇）の師である。

本書の内容・成立年代など本書の内容は、広く諸般の中より古人の語句（四言・五言・六言・七言）を集め、これを韻別に分類し、二十五巻に編成したものである。いわゆる句集そして韻書、辞書を兼ねており、室町中期から江戸期を通じて、漢詩文の創作者の参考資料として用いられたものである。書名は天隱が著者である宗順の求めに応じて命名したものであり、天隱は「就予需斯集名」と序に記している。更に「転凡作聖也得、如還丹一粒点鉄成金、名之曰点鉄集也」と命名の理由を述べている。つまり、本集の中より必要の語句を搜索して法語・偈頌・詩文を創作し、これを拈提すればその言葉は衆生を迷いの世界から悟りの世界へと一転させる力を持つという。さらには中国の説話に見られるように、靈藥・丹すなわち神仙秘

密の妙薬、一

粒を鉄の上に置けば、たちまち鉄が金へと変化することに喩えて

「点鉄集」と名付けたものである。

それでは宗順が本集を編纂した時期はいつ頃であろうか。何故ならば、本書に

成立年代は記されていないので、確たることは不明である。しかし序の識語に「文明十七年乙巳端午、前建仁黙雲天隱叟竜沢（図1）と見えているから、文明十七年（一四八五）五月五日以前に編集を完了していることは確実に

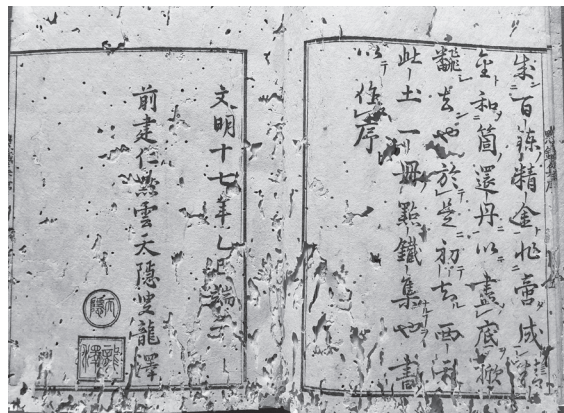


図1

ある。そこで宗順の経歴について考証すると、『宇宙山住山記』<sup>4</sup>によれば、文明七年（一四七五、四十三歳）尾張知多郡緒川城主の水野貞守の招請により、同地に宇宙山乾坤院（愛知県知多郡東浦町緒川所在）を開創し、師の川僧慧濟（同七年七月九日寂）を勧請開山とした。自らは第二代住持となり、宗風を宣揚し、教団の地方発展に尽力した。同十一年（一四七九）に遠江一雲齋（静岡県磐田郡豊岡村所在）に晋住し、更に同十六年（一四八四）には、同大洞院（同県周智郡森町所在）に転住した。翌十七年再び一雲齋よりの請を受けたがこれを固辞し、代りに法嗣宗田を住せしめている。次いで十八年には大洞院を退き、再びもとの乾坤院に帰住している。以上の行実から推定すると、本集の成立は宗順が文明十一年（四十七歳）に一雲齋に住して以降、同十七年（五十三歳）大洞院在任に至る約七年間であって、その殆どは一雲齋住山時代に完成していたものと想像され、恐らく数年の歳月を費やして著わしたものと思われる。宗順は多くの書物に目を通し、その中より多数の語句を抜粋して集大成するために、長い年月と不断の努力を必要としたことであろう。

中世曹洞宗における偈頌運用（大橋）

なお乾坤院文書に、文明十三年十二月二十日に誓仲弘という僧が、川僧書写の『禅儀外文抄』三巻を宗順に授与したことが記載されている<sup>5</sup>。この本は絶海中津と並んで五山文学の双璧と称された義堂周信が、虎関師錬が四六駢儷文についての作法を講じた『禅儀外文集』である。川僧がこれを筆写し所持していたものを、寂後七年を経て弟子の宗順が受領したというのであるから、この記録は本集の成立過程に深く関係しているように思われる。これは恐らく誓仲弘が、前出の『外文抄』を参考資料として与えたものと想像される。

次に本集に取められている語句の出典を分類する。

- ・史伝『景德伝灯録』、『嘉泰普灯録』、『五灯会元』など
- ・経疏『首楞嚴経』、『金剛般若経注』など
- ・宗義『人天眼目』、『少室六門集』など
- ・頌古『碧巖録』、『従容録』など
- ・語録『臨濟慧照禅師語録』、『投子義青禅師語録』、『天童如浄禅師語録』など
- ・蒐録『禅林類聚』、『林間録』、『羅湖野録』など
- ・外集『石門文学禅』、『貞和集』など

中世曹洞宗における偈頌運用（大橋）

・經書『論語』、『毛詩』、『礼記』など  
・詩文集『楚辞』、『文選』、『唐詩選』、『唐詩歸』、『宋詩選』、『韓文』、『柳文』、『白氏文集』、『三体詩』、『錦繡段』など

・詩話『冷齋夜話』、『誠齋詩話』など  
・韻書『広韻』、『韻会』など  
・類書『事文類聚』、『韻府』など  
・小説『剪灯余話』など

典拠は以上のように多方面に渡っており、渉獵した書物の数はおよそ百種に及ぶ。それは、宗順の学問及びその読書分野が意外なほど広範囲に渡っていたことを物語っている。中でも右の「外集」以下「小説」に至る間の関係引用書の類は全体の半数以上を占めているが、本書の性格上当然なこととはいえ、宗順の詩学者としての風格を偲ぶに十分である。

二 逆翁宗順と中世叢林文芸

推測すると宗順が本集を著わすに至った要因は、当時禅林を風靡した五山文学の影響によるものであろう。しかし

直接には洞門屈指の民間詩人として高名な師匠・川僧の薰陶と、その門下にあつて書記の職に就いていたことに起因するものである。書記は叢林西序の重要な役で首座に次ぐ役位であり、書翰作成を担ったのである。つまり榜（告知）・疏（表白文）・書簡・祈祷の詞語等、公的な文書の作製をするのがこの書記の役割である。そしてそれらの文書は四六駢儷体という対句で構成された技巧的な文章で表記され、且つ美しい文学的なものである。禅林学芸の起因の一つとして、禅林にかかる書記の職があつたからであるともいわれている。こうして当時の禅僧社会あるいは武家社会の一部における詩文熱の高揚に伴い、本集のような書の出現が要望されていたことは想像に難くない。純然たる信仰あるいは学問的要求からというよりは、むしろ禅僧自らが法語・疏・偈頌・詩文の創作ないし中国文学の理解と鑑賞という、いわば文学的要求から宗順が本集を著作することの必要を痛切に感じていたからであろう。この要求に応じて、宗順がこうした実際上の活用を主とした引き易く、わかり易い韻別による句集の辞書を編纂し、漢詩文創作者のため供給したことは、時流に適つたものであつたといえ

よう。川僧の詩僧としての風格はその語録によつて窺うことができるが、宗順の詩學者としての風貌は、これを物語る作品が本集以外には残されていないため、詳しいことは不明である。しかし宗順は伝によれば、既に早くより儒書・史籍・易学に傾倒していたことが知られる。また書記の職にあつたことや、本集を著したこと等から考えていざれ中国文学に精進し、あるいは天隱その他の五山派臨濟の詩僧とも親交を結び、特に詩文に秀れた人で禅僧と呼ぶよりは詩僧と呼ぶに相応しい風格の人柄であつたものと推測される。このような余程の詩才の僧でなければ、本集のような書を編著することは容易にできるものではない。

### 三 壇越供養と偈頌

逆翁宗順の著作は『点鉄集』の他には現在まで未発見であり、本人の思想を伺いうる資料はない。そこで次に近年、国文学の分野から再考された逆翁の師、川僧慧濟の偈頌の作風から『点鉄集』への影響を考えたい。

現存する曹洞宗の法語・偈頌資料は洞門の禅風の変化という観点によつて三段階に分けることが可能である。ま

中世曹洞宗における偈頌運用（大橋）

ず、『永平広録』、『山雲海月』等が著された十三〜十四世紀、『通幻録』、『実峰録』等が著された十四〜十五世紀、そして、『川僧禅師語録』等の十五世紀以降である。第一期の資料の内容は坐禅中心となつており、第二期には葬送儀礼に関する内容が坐禅に関するものと同等の分量を占めるようになり、第三期には葬送儀礼に関する言及が内容の半分以上へと変化する。この変化を曹洞宗が諸国へ教線を拡大する時系列を踏まえると、壇越の増加にともない葬儀の要請に応じる必要が洞門僧侶に出てきたと推察される。一例を挙げると、『川僧禅師語録』には葬祭に関する言葉も多く収録されている。全三巻の内「偈頌」と題された項目は、壇越供養のために行われた下炬が占め、中巻に一六〇編、下巻に一七四編を収めている。これは川僧の時代には洞門の僧が葬儀にあたって詩偈を作成するという行為が常態化していたことを示している。

また、尾張乾坤院には『血詠衆』と題される逆翁の手による授戒会記録と、『小師帳』と記された芝岡宗田による戒弟名簿が所蔵されている<sup>7)</sup>。布教の一環として開催された授戒会は、信徒の獲得や宗侶の連携と結束を促していたと

#### 中世曹洞宗における偈頌運用（大橋）

いえよう。引請師として芝岡下で頭角を現し、乾坤三派を形成する亨隱慶泉（?〜一五〇三）・周鼎中易（?〜一五一九）の名がみえ、また、亨隱の法嗣、大中一介（一四四七〜一五三二）も記されることから、檀越供養の気風は次世代へ継承されたと捉えることができる。

以上の点から、川僧の詩文を重んじる禅風に、檀越増加による布教の方途として偈頌が運用されたと考えられる。

#### 四 他写本との開版時期の比較

本書の承応版と室町期開版の想定本集の著者自筆の草稿は、乾坤院に所蔵されていたが、いずれかへ散逸したと考えられる。江戸初期の承応四年二月上旬（四月十三日明暦と改元・一六五五）に『増補点鉄集』と題し、京都村吉兵衛より刊行されているため、これによって本集の内容等を知ることができる。この承応版『点鉄集』は、愛知学院大学禅研究所、京都天童寺の塔頭・慈濟院、国立国会図書館、駒澤大学図書館に所蔵されているが、その伝わるものが極めて少ない。この四本を対比考究するに、先ず書冊形式について述べれば、禅研究所本・慈濟院本は二十五巻十

二冊で袋綴本である。表紙は第一、二、八、十二の各冊が渋表紙、第三、四、五、六、七、九（慈濟院本は表紙なし）、十、十一の各冊が藍表紙である（図2）。また各冊共に外題紙がない。匡郭は四周辺で、匡郭内の上方を横に区切ったいわゆる上層内には、各語句の上毎に出典が略記されており、例えば『五灯会元』巻十二は「会元計」、『中峰和尚広録』巻四は「中峰四」のごとくにそれぞれ略名をもって示されている。界線はなく、行格は片面十一行八字〜十四字詰、版心の上部及下部に寛黒口あり、その間に巻数、丁数がある（図3）。巻頭には天隱自筆の序が印刻してある。最終の巻二五の末尾には三行に「承応四年、二月上旬、西村吉兵衛」との刊記がある。

次に国会図書館本・駒大図書館本は、共に二十五巻十五冊で、袋綴本、寸法は縦二十糎、横十四（駒大本）、表紙は全部薄茶色、これは両図書館が収蔵した際、改装したものである。従って外題紙は書名をこの時に書いて貼付したものと思われる。匡郭、上層、行格、版心、序、刊記などいずれも慈濟院本と同じである。四本の内、禅研究所本・慈濟院本は国会図書館・駒大の両本より版型が大きく、両

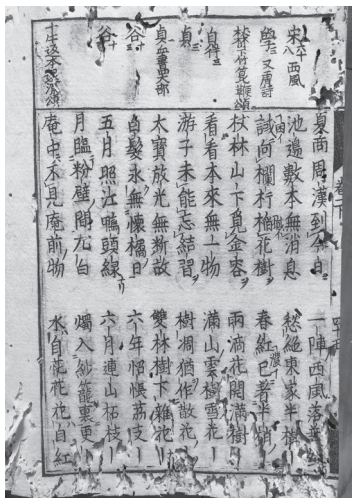


図3

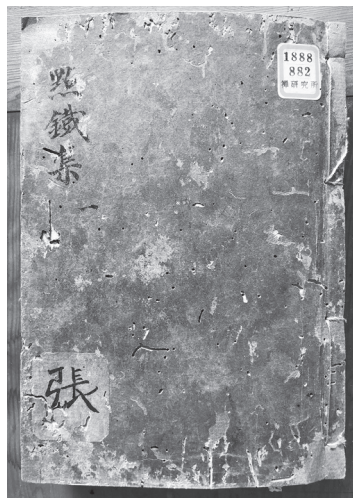


図2

中世曹洞宗における偈頌運用（大橋）

色混同してはいるが表紙も改装されておらず当時のままと  
 思われ、本全体に古雅の趣を呈している。冊数の上から  
 いても、禅研究所・慈濟院本は十二冊であるために、一  
 冊の巻の収載数の非常に多い部分が存し、各冊の丁数の整  
 合性がとれていないという欠点がある。それは国会図書  
 館・駒大の両本は十五冊であるため、慈濟院本よりも三冊  
 増やした後に不備の点を是正し、使用上の利便性の向上を  
 図ったことが窺える。三本とも刊記は同一であるが、以上  
 の点から推測して慈濟院本は恐らく増補の初刻本であり、  
 国会図書館・駒大の両本は後刷本であるように考えられ  
 る。当時この『点鉄集』が詩作用の辞書として禅僧社会に  
 多く需要されたので、回を重ねて印刷したことが推察され  
 る。しかしよく使用されたわりに散逸の度が高く、現存す  
 る版本はごく稀であるため、右に述べた四本は稀観書に属  
 するものである。

次に注意すべきは、この承応版に「増補」と記されてい  
 ることである。これによれば、既に増補されていない版  
 本、すなわち宗順の著作した草稿のままの『点鉄集』が刊  
 行されていたことが予想される。そこで承応四年以前に上

梓された禅籍について調査すると、洞門禅侶の手になる抄物、慶安二年（一六四九）刊行の『大淵代鈔』（元和七年〔一六二二〕から寛永十二年〔一六三五〕の間に成立）の巻一には「代云、攀<sub>レ</sub>嶺<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>楊柳、貴妃笑破<sub>レ</sub>石門<sub>（8）</sub>」とあり、句の下に「点鉄集二」と記して『点鉄集』より引用している。この他にもまだこうした例はあると思われるが、本集が既に室町時代に開版されていることの証左の一つといえる。宗順は天隱に文明十七年に序文を書いてもらい、その四年後の長享二年（一四八八）八月十五日に示寂しており、その間に大洞院より乾坤院・長松院と転住し、かなり身辺が多忙であったため、生存中に開版されたものとは考えられない。宗順自筆の草稿が最近まで乾坤院の歴代住持により伝承されてきたこと等から想像して、恐らく宗順寂後、弟子の芝岡宗田あるいはその後における同院住持の何人かによって上梓されたのではないかと思われる。しかし現在室町期の版本即ち原刻本は、いずれにも発見されていないようである。更に承応版発刊の際、語句を増補した人は誰かという疑問が残るが、これについても未だ不明である。またどの程度の数に語句が増補されているのか、草

稿本・原刻本ともに見ることができないので、この点も詳らかでない。今後の考究すべき課題であろう。

## 五 著者の伝承に関する問題

しかし『点鉄集』の本文中には「逆翁宗順」という正確な著者名はいずれにも記されていない。しかし次に述べるように、数点の資料によってこれを知ることができる。すなわち本集には臨済宗の詩僧として有名な天隱電沢（一二四二〜一五〇〇）の序（後述の承応版に収載）が存在し、その序文の冒頭に次のように記されている。

新豊的骨梅山孫謀有<sub>一</sub>英柄、人喚<sub>三</sub>頑書記、自称<sub>二</sub>蔵鷺叟<sub>一</sub>、壯歲參<sub>三</sub>扣諸家門庭<sub>一</sub>、今村院閉<sub>レ</sub>門自適、其適禅余、為<sub>二</sub>初機後学<sub>一</sub>集<sub>二</sub>古人語句<sub>一</sub>（図4）

これによれば著者は、新豊すなわち曹洞宗の梅山聞本下の法孫で「順書記」と呼ばれ、「蔵鷺叟」と号した人物であることがうかがえる。そこで『日本洞上聯灯録』巻七にある逆翁の記を見てみたい。

尾州乾坤院逆翁宗順禅師、自称<sub>二</sub>蔵鷺叟<sub>一</sub>（中略）令<sub>レ</sub>掌<sub>二</sub>記室<sub>一</sub>（中略）師纂<sub>二</sub>修点鉄集<sub>一</sub>、建仁天隱作<sub>二</sub>之序<sub>（9）</sub>



続いてその序の末尾に記してある語を引用し、以下のよう  
に述べている。

有下試拈出一条生鉄、抛向老人面前、則点以成百鍊  
精金、非啻成精禽、和箇還丹以尽底掀翻去也、  
於是初知西天此上一冊点鉄集也之語、由是師之道  
義、可概見焉(図一)

「蔵鷲叟」とは逆翁宗順の雅号であり、宗順は禅林にお  
ける書記(記室ともいう)の役に従事していたため「書記」  
と呼ばれていたことが知られ、『点鉄集』はこの宗順が編

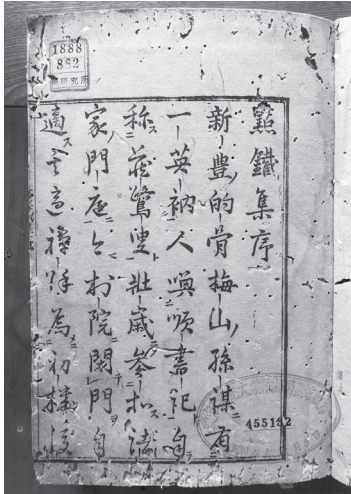


図4

中世曹洞宗における偈頌運用(大橋)

集したものであることが確認される。なお『越前竜沢寺前  
住帳』によれば、三三世芝岡宗田の下に「川僧孫頌書記法  
嗣」と見えていることから、「順書記」と呼称したことは  
もちろん、梅山下の法孫であることも判る。宗順の法系  
は、梅山聞本・如仲天闇・真巖道空・川僧慧濟・宗順と次  
第しているから、序文に記されたように梅山下の法孫であ  
ることも明瞭となる。以上の点から鑑みても本集の著者  
は、逆翁宗順の可能性が高いことが判然する。古いもので  
は『日本禅林撰述書目』に「点鉄集、天隠」と記されてお  
り、また、『禅籍目録』にも「増補点鉄集、一二卷、竜沢  
(天隠)」、また『仏書解説大辞典卷八』にも「点鉄集(増  
補『点鉄集』十二卷、存、天隠竜沢」と記し、いずれも  
天隠の著としている。また『禅籍目録附録』の「同名異書  
一覧」の項には、天隠の著わした『点鉄集』と、宗順の著  
した『点鉄集』とが並存し、著者を異にする同名の書が二  
種存在するかのよう記されている。そこで天隠の著作を  
調査すると、彼には『点鉄集』という書名の著作は一冊も  
存在しておらず、従って前述の記載がいずれも誤りである  
ことが判る。各書がこのような誤認を起こした要因として

は、本集の巻頭に天隱の序文が存しているため、これを著者の自序と誤ったために天隱の著作としたものと推察できる。また仮に序文を読んだ上で内容を吟味しても、ただ「順書記」とか「蔵鷺叟」とあるのみで、何人が著わした書か全く不明であるため、天隱に托して記したものとも思惟される。

### おわりに

以上の考証により本集の成立は室町中期、十五世紀末であり、著者は天隱ではなく、洞門の逆翁宗順と考えられる。開版は師の寂後に乾坤院住持の何人かによって行われ、再び江戸初期に増補版が書肆より出され、その後重ねて刊行され、両時代を通じて禅僧社会に盛んに使用されていたことが判る。従来、韻書・詩話・詩文集等の外典の編集刊行は、済門の禅侶によって多く行われていたが、洞門禅侶によるこの方面の典籍の編刊は極めて稀である。思うに本集が外典であり、道元の禅風とは異質であるために、宗門にとっては重要視されてこなかった。しかし、室町期における曹洞と臨済の交渉、洞門禅侶と五山文学との

関係、曹洞宗教団の思想的傾向等の一端を知る上で、好箇の史料というべきである。

### 註

- (1) 鏡島元隆『道元禅師全集』第七卷、九〇頁
- (2) 鏡島元隆「詩僧道元禅師」（『續輯永平正法眼蔵蒐書大成』月報二、平成三年三月、一頁）、伊藤秀憲「吉祥山命名法語」解題（『道元禅師全集』第七卷、三八七―三八八頁）
- (3) 本書は愛知学院大学禅研究所が古書として購入した計十二巻の和綴本である。本論において考察するように、その形状および書式から承応版写本の一つと思われる。
- (4) 逆翁宗順とその弟子の芝岡宗田の行状については、広瀬良弘「中世禅院の運営と経済活動―尾張国知多郡乾坤院所蔵『一枚紙写』を中心として―」（『駒沢史学』二四号、七二―九一頁）において考察されている。頃に土豪層・一般農民、商人・職人と師弟関係を結んでいた点を論じている。
- (5) 『曹洞宗全書』「史伝」上、三七〇頁下段
- (6) 『曹洞宗全書』「語録」一、三〇七頁上段―三六四頁上段
- (7) 広瀬良弘「中世禅僧と授戒会―愛知県知多郡乾坤院蔵『血詠衆』「小師帳」の分析を中心として―」（広瀬良弘『禅宗地方発展史の研究』吉川弘文館、一九八八年、四二―四

八一頁)

『血詠衆』は、文明九年（一四七七）から、同十九年までに、乾坤院・一雲斎・大洞院ほかで催行された授戒会について、日時・場所・戒弟名・住所・引請師などについて記したもので、逆翁の個人的名簿といえる。同寺開創の二年後には授戒会を催し、半年間で一八九名の戒弟を集めている。『小師帳』は、乾坤三世となる芝岡が、逆翁の『血脉衆』に習って記録した授戒会の記録である。延徳二年（一四九〇）と三年の日付があり、戒弟数九五を記す。特徴としては俗縁に関する付記が詳しく、苗字を持つ者とその家族の受戒が多いことである。

- (8) 駒澤大学文学部国文学研究室編『大淵代鈔』上巻、二二頁（『禪門抄物叢刊』第二之一、汲古書院、一九七三年）
- (9) 『曹洞宗全書』「史伝」上、三七一頁上段
- (10) 福井県文書館蔵『越前竜沢寺前住帳』（デジタルアーカイブ C00620039,1x1）
- (11) 鈴木学術財団編『大日本佛教全書』第九六巻 目録部二、二六一頁
- (12) 駒澤大学図書館編『禪籍目録』五六八頁

中世曹洞宗における偈頌運用（大橋）